

太陽の音楽（1）

1.人間が、普通本来の在り方を見失ったまま、長いことそこへは戻れずに、変化とは縁遠い時を連ねて来てしまっているその理由には、意外にも、人々が親しみ、楽しんできている歌の存在がある。歌は、人の心を動かし、生きる力の源にもなり得るものだが、心の性質にまで責任を持つものではない。素朴な人も、ずる賢い人も、優しさを普通とする人もそうではない人も、皆同じ曲を聴き、同じように心地良さを覚え、そして好感を持つ。しかし、人として変わるべきことに影響を及ぼし、その原因を確実に動かす心ある歌となると、残念ながら、どこにも無い(に等しい)。

仮に、ある歌の中で、人々の声(心情)を代弁するような内容のことが歌われていたとしても、そうである必要性が生じる状況に至るまでのその無くてもいい原因の蓄積(の事実)は、そのまま居座り、変わることはない。聴き手は、ただ不安や苛立ちの類の感情を思考で処理し、気分をすっきりとさせられただけ。もちろん、それだけでも、それなりの意味を歌は持つが、それ以上は無い。歌を聴いて変われるレベルで、その歌が誕生する現実のその背景(土台)を変えることは出来ない。

愛情や信頼、同情や支え合いをテーマに歌われる歌に刺激され、感動を覚える自分が居る時、その本当の姿が、理由も目的も(見返りも代償も)要らない愛情を普通とする原因の

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

それでなければ、その歌を通して、嘘の人生が固められることになる。愛情や信頼をテーマに、そうであろうとする(そうでありたい)歌は、それらを育むことなく不自然な生を生きる人に支持され、無責任な原因を残したまま、妙な力を持つ。愛情は、歌を通しての経験から育まれるものではない。信頼も友情も、感情を刺激されて、その力を高めるものでもない。

2. 本音と建て前が使い分けられる人の世では、その背景となる、形ある結果(過去)に居座る感情が時流を生み出すため、そこで流行る歌の殆どは、キレイ事・他人事を良しとする人たちに支持される。そうであってはならないと思う人たちも、その多くは、そのための新たな原因を選ばず、その上での現実に都合良く一喜一憂して、その気もなく狡く生きる。

その時に経験する、自己反省を趣味とする、身勝手な気落ちとストレス。歌は、そんな人たちに向けられ、彼らを慰め、励まそうとする。歌う人も、聴く人も、歌を材料に、嘘の心で、変化を遠ざける。

人の力になりたいと、音楽の世界に関わり、歌を歌う人は、人が力を失くしてしまっているその結果を材料に曲を作る。しかし、どんな場合でも、そこには、そうなるまでのそれまでがある。その原因に触れようとはしないその姿勢は、挙げ句、自らもその結果を固め、更なる負の現実を積み重ねることになる。

そのままで人の心の力になれる人は、自分が歩んできた道と、そこでの自分の普通(の感覚)を曲にし、歌う。それだけ。

8. この「太陽の音楽」を通して経験することが、終わりの無い(見えない)厳しさと辛さである人。そうであるような経験を経て、安心と健康を普通としていく人。それはそのまま、その人の生の本質であり、自然界の中での自分の居場所(次元)である。それは、思考では決して処理し得ない原因の姿。その体験的知識(理解)を以て、改めて人生を見つめ、(原因の)嘘が許されない生き直しと、嘘など考えられない再スタートを切る。音(音楽)の原因の浄化による変化の可能性は無限であるから。

動きの無い(動きを止める)音の力によって、非情にも人間本来の音(音楽)が消され、そのまま非人間的な歴史を連れて来ているこの国の姿。そこに在る、凝り固められた異様な音の記憶(の原因)は、自然界の生命たちも応援する太陽の光の音の送り手(受け手)によって、確実に砕かれ、新たな変化に乗せられていく。そして初めて引き寄せられる、争いや病気の原因を知らない、普通の人間社会。「太陽の音楽」は、太陽の光の音の通り道となって、ずっと先の未来にまでそれを響かせる。ふと気づけば、見えるもの、感じるものが、自らの姿である太陽の心の、水と空気になる。(by 無有 6/12 2018)

風景へと全てをいざなう。その時が、今ここに在る。

7. 呼び醒まされるようにして動き出す、太陽からの音の世界。生命を生きる人間経験のその必要とすべく全てのものがそこには在り、人の心の芯も、そこに居て、それと重なる。どんな言葉を以てしても表すことは出来ず、どれ程の経験を積んだとしてもその域には無い、太陽の意思そのものの音。それが普通である人の何気ない経験の中から、生命世界の再生のような時間が流れ出す。

そのための条件は全て揃い、ここに繋がり得たその原因も、強さを増す。あらゆることが覆されるがごとく、物事の(原因の)その真を知る生命の意思は、躍動し、事を変える。心身は、生まれ変わるような時を馴染ませていく。

その普通を生きる生命(人間)たちは、かつて、不穏な力でその自由を押さえられ、執拗に潰されて(脳を操られて)、何度も「歴史の芯」の現実に関わりを持たされる。その「歴史の芯」は、彼らがこの「太陽の音楽」へと辿り着けるよう、そのための力を付ける段として在る。それは、太陽にずっと守られていたことを意味し、どんなことがあっても今ここに居ることではか為し得ないこの時のために、その全ての支え役をそれ(歴史の芯)は担う。そこでの厳しい人間時間を受容し得たことで、内なる生命の意思は、太陽の光の音を心に聴かせる。この時のために、これまでがある。

力ある自分を見失っていた人は、それを、本来を取り戻す機会とし、自らもそうである姿を甦らせる。

いつの時も、形ある何かのためから始まる歌は、その多くが、広がりも深みも無い、変化を拒む道具。それは、人の自己満足を演出し、見た目ばかりの優しさと偽善を作り出していく。

3. 矛盾とか不合理とかの形ある次元ではなく、それらに触れることで内でうごめき出す感覚的な違和感の、その理由は何なのか? 世の普通に迎合することが考えられない日々で培ってきた体験的理解の性質は、どこへ向かい、どう活かされるのか? 不安や緊張の中に抵抗することなく居続けたことで自覚し得た、形無き存在の姿は何なのか? そして、それらの経験のエッセンスが伝わることで、何を生み出し、何が引き寄せられるのか? その感覚と発想は、現代における音楽の基本である。

助けたり、助けられたりするのとは、人としての当然の行為であって、癒しは、その原因となる風景の中に入っていき厳しさと、そこでの力強さを身に付けること。優しさは、共感したり、分かり合ったりする時の想いではなく、共感しなくても、分かり合えなくても、ずっと変わらずそこに在るもの。悔やんだり、求め、願ったりする感情は要らない。哀しみを感じ、喜びを分かち合うことも、結果に留まるのなら、それらは要らない。

その場所から生まれる音楽は、何気ない感覚に厳しさを与えられる力強さを、人に経験させる。今居る世で、自分の心を

力に生きて行けることを応援する。それは、作り手自身にもそう。先に気づき、先を歩いているから(そのことを音楽を通して表現できるまで来れたから)、それをそのまま歌にし、道を照らす光になる。

4. 曲作りを通して歌い手が成長すると、聴き手も変わり、聴き手が成長すると、曲の感じも変わる。音楽は、聴く度に感じる場所が変わることを普通とし、音楽と人は、一緒に成長する。

そんな曲の送り手は、ただありのままにいるから、何かに負けないようにとか、頑張らなきゃとかの発想と繋がる状況知らず、大変さも、辛いという現実も実感が無い。格好をつけ、人気者になろうとしてやっているわけではないから、何を求められ、どんな期待を向けられているかには感知しない。それだから、歌詞に収まり切れない感覚が歌詞になり、曲調も自在で、どこともぶつからない(感動・感銘の域には無い)。それでいて、聴く人の内なる変化に付き合い、自らも変化する。人は、曲を通して、音楽という名の生命体験を普通とする。

今までの音楽とは違っているようには思えないのに、その実、全く違っている音楽のその部分は、覚えにくいところ(覚えようとするより、何度も聴き、自然と(覚えられるところを)覚えられるようになる自分を選んで)。考えて作らず、頭でその機会を引っ張らない中で生まれる曲は、聴く人の内側に記憶されたそれまでの曲の、その性質の原因を浄化する。それは、分かっているのにどう分かっているのかよく分からない

質(中身)と言える。人間は、一生命としての人間本来を持ち合わせていれば、その音との融合を普通とする。太陽の光の音は、自らが生み出す空間(時空)への、その自浄力の原因とも言える。

6. その太陽の光の音が、この「太陽の音楽」から流れ出す。その質は永遠の普通のそれだが、これまでの(人間が経験しなくてもいい)負の蓄積と、非生命的な音(音楽)の染み込みがかなりであるゆえ、当然その働きかけの次元は、以前の時とは大きく違う。その反動も…。

それへの抵抗の原因は結集し、拒否反応は、思考に力を注ぐ。本性(本体)は本気で暴れ、力ある嘘に隠れ、真を潰す。永いこと太陽の光の音の流れる場所を遮ってきた経験は、これ以上無い厳しい時を迎える。その時を、自然界も、太陽も待っていた。

そして、結集した抵抗の原因は次第に瓦解し、拒否反応の思考の力は、向かう場所を見失う。本体は、この時代ならではの必要性の前で焦り出し、怯えを顕にし、居場所を無くす。いつしか、真に癒され、嘘の素顔を忘れる。

太陽の光の音は、その仕事を喜んで行う。そのための時をこれまで経てきているから、さらりと遊び感覚で、この無有日記の動きに合わせてつつ時を本来へと変えていく。どんなところにも届き、どこまでも、どんな風にでも流れ行くそれは、始まったら、「心の遺伝子」の頃のような生命本来のその原因の

動物たちの生きる自由を奪うもの。その負の原因からなる音感(感性)は、この現代にまで存続し、変化とは無縁の音楽のその下支えの役を担う。

5. 太陽の光の音は、人の心の芯を通り(「歴史の芯35」)、心と繋がる脳の、普段何かのための仕事をする事のないある部分を刺激するようにして、音とも言えない音となって伝わり出す。それは、自然界の意思との融合体験の時とも言え、いつ、どこに居ても、自動的に始まり、そして終わるともなくふと気にも留めなくなり、気づけばいつのまにかまたそうなっていることを意識し得る自分が居る。その意味も理由も何も分からなくてもいられる心の余裕にいつも支えられ、守られている。

それは、音という言葉で形容され得る世界には存在しない、細胞の喜びの声であり、時空が安心を覚える時の波長のようなものである。余りに普通で、何の違和感もなくそうであるから、その人にしか感じ得ず(その人にもそうとはよく分からず)、そうである人同士で、分かり合うという次元を遥か超えたところでの融合を共にする。それは、生命世界の自然治癒に参加する、その原因の音のようでもある。

普通に経験することから、そうであることも分からずに始まるそれは、普通の質が思考型のそれである人のその不自然な世界には近寄ることはない。音であって、音ではない音。それは、地球のリズムを支える太陽の光の、その多次元的な本

そのことを、分かる言葉(文字)で伝え、そのよく分からないけど分かっていることを何となく感じてもらえることを望みつつ、分からないままその全てを曲に乗せて、分かり合う世界。その共有体験は、そのまま音楽の本質を余裕で眺めることになり、互いはそこで癒され、時を癒し得る時空(次元)を共に漂う。

5. そうじゃないはずなのに、どうしてそうなのか…と、悲しみや切なさを歌う。本当は、どこにもそれらは存在しないことを分かっているから、悲しみを歌い、一切の悲しみを伝えない。そして、気づかないうちに、人は、悲しみの理由を手放す。

不安絡みの感情は全て本来ではないことを知るから、何があっても、心の芯はぶれることはない。こう在るべきとする、形あるものを求める自分も知らないから、どこまでも自分(人間)らしく生きる基本は変わらない。そのことを無くして(外して)音楽を表現することなど考えられないから、ただそれをそのままに、自分の歩みに連れ添う感覚を曲にする。

言葉で表そうにもそうにはならない世界の何かが、体よく繋ぎ合わされることを望まない文字(言葉)たちがつくるその何気ない間の、文字無き空間を通り抜ける。曲と重なり合うことで永遠の場所(仕事)を見つけたそれは、聴き手の変化の中で、色を変え、形を変える。彼(彼女)は、その送り手としての役を、この今の時代に担う。

そこに居ること、居続けることで、必ずやそれが変革の仕事になることをどこかで分かっているから、その時まで、ただそこ

に居る。その内奥に在る意思(静かなる鼓動)を温めつつ、その時を待つことなしに待ち、そして、共にそれまでが姿を消し得る大きな流れに乗る。太陽の音楽を奏で続ける。

6.個人的な趣味・嗜好の材料や商売の道具(商品)として音楽が扱われる世で、真に音楽を表現することは、至極難しい。でも、そうであり続けることで、その難しさの度合いも変わり得ることを知る存在たちは、そのまま、感じるままに触れる世界を形(曲)にし、その質の変化に責任を担う。どれ程の厳しさか…。それを実践するのが、音楽を手にした生命の姿であり、表現者としての喜びである。

そして、聴く度にもたらされる、新たな感触と変化(気づき)を通して、人は、自らも表現者であり、変化し続ける生命であることを経験する。それを為し得るのも、音(声、言葉)を通して、全てであるひとつと繋がる原因が、自由に姿を変え、あらゆる性質のものとなって流れ出して来ているから。そうであることの普通を生き、それが音となり、曲となっているから。その音の世界で、送り手と受け手の違いは無くなり、それぞれの心の強さとその輝きが、心の風景を広げる。

心地良さを覚えることが優先された曲は、何度聴いても、何も変わらない。というより、無自覚に秘めた狡さを増大させ、形無き原因の影響力に無責任になる。なぜなら、そういう人が、そんな曲を作るから。変わりたい(変えたい)、でも本当は変わりがたくない(変えたくない)人が、ずっと変わらないでいられる

命としての人間の、その(音の)意思表示を本来にする。その誘い水の役を担ったかの音楽の存在に、自然界は感謝する。

不思議でも何でも無い太陽の光の音との出会いは、生命の意思をそのまま表現しようとする人の、希望の時。そうである事実も、さらりと普通だから意味がある。そして、そのことに理由は要らない。太陽の光の音は、元々の、自身の音であるから。

4.この地上の世界には在ってはならない非人間性からなる感情によって尽く押し潰されてしまった、心ある人たちの音の風景。そして、そこから始まった嘘の音楽。その時に流れる場所を無くした太陽の光の音の、その切ない現実を考えれば、ここに甦ったその音を通して、人間社会の原因は深くから再スタートを切るであろうことも理解できる。太陽の光の音とムリなく自然に融合する人と、そうではない人。前者は、ずっと自然界が応援していた人。後者は、自然界に嫌われ続けている人である。

時代には意思があり、どの時も、自然界の望みを人間時間に通そうとする。人間の身勝手な思惑も、思考による期待・解釈もそこには通用せず、動きの無いまま過去に居続ける価値観も、それは受け付けない。

時代が、怯えと恐怖心からなる力の行使で不要にも刻まれる時、そこでの音楽は、人の脳を不自由にさせるためのものとして、力で運ばれ、伝わっていく。それは、人間らしさを遠ざけ、

し、無きものにする。そして、それまでには無かった人間の感情からなる不自然な音を、人の脳に浸透させ、そのことによる心の不自由さを固めていく。

人の世がそうであり、その歪な音の形がそこで続けられていても、自然界に生きる人間の中には元々それは無かったゆえ、そのままであることはない。かつて自然界との融合を普通に、自然な音を楽しんでいた人たちのその経験の記憶の中には、石や貝殻を通して育んだ地球感覚(の音感)が在る。それが消えることはない。

その時が来るまでそのままでいるしかなかった永い時を経て、遙か昔の音の風景のその源泉となるものが、ここに届けられる(繋がり得る時を迎える)。それは、太陽の光の音。心が育む、心ある原因の風景にとって、これ程の喜びは無い。

3. 太陽の光の音というのは、生命の意思のその本質となるものに自然と響き渡る、生命源からなる音である。そうである人にはどこまでも普通であって、そうではない人には限り無く意味不明なそれは、それと触れ続け得た何人もの繋ぎ手によって生き存え、音楽という概念も無かった時代の音の真実をここに運ぶ。

太陽に守られる地球自然界と、そこで生きる生命たちの、その喜びの音。その自然界の一部となる生を生きる人間の記憶(心の遺伝子)の中で、共に人間本来を支え続けた、責任の音。「太陽の音楽」で安心してその時を迎えたこの今は、生

身勝手な心地良さを曲にする。

大衆が好みそうと作られた曲も、一風変わった曲も、皆頭から始まり頭で終わるという停滞の原因を潜めた曲で、物事の表層のみの理解で事を済ませる(心を思考で扱える)人の、その自己満足の材料となる。それらの曲には、人の不満や不安の感情を上手く嗅ぎつけて利用する質の悪い宗教にも似た狡猾さと悪辣さが在る。

7. 自分の中に在る、「なぜそうなのだろう?」という現実に関き合わさせられるその理由と向き合い、全受容の中での素朴な発想に身を委ねる。振り切るべき感情の正体に光を当てるようにして、感性を自在に遊ばせ、その時の変化を音に換える。言葉と音は、重なり、かみ合い、融合し、力となる。歌詞は、曲の中に溶け出し、曲は、どこまでも仕事をし得る力を手にする(旅に出る)。

健全な感覚ゆえの素朴な違和感は、それを(その対象を)処理するよりも、そうである事実を受け止め、自然にその奥(原因深く)へと入り込む。その時、その事実を変え得る力になろうとする、それまでには無かった原因が、音や言葉となってその人を通る。曲は、変化し続ける生命のかたちとなる。

感覚のまま動き出し、その原因を成長させるようにして生まれる曲は、思考型の(感情の)満足の道具として歌に接していた人には、緊張を覚えるものになる。それまでの経験からなる音感と感性が通用しないため、馴染みにくく、覚えられない

太陽の音楽（3）

(残りにくく、扱いづらい)。でも、そのことが、新たな時を引き寄せるかけがえのない原因となり、気づけば、自らを変化させる。そして、その気もなく蓄積させていた不穏な(質を備える)音楽のその負の原因の影響を知る。

その仕事を普通のこととして担い、本来在るべき姿のその基本となる原因をさらりと送り続ける存在。そうであることも知らず、そうであろうとすることもなく歌い続ける彼(彼女)の曲を通して、人は、この時代にしか出来ない、存在そのものの質を成長・進化させ得る経験を手にする。永い時を経て、この国では、初めて、音楽が笑顔を見せる。太陽の音楽となって、心の芯を流れ出す。

8. 音楽を通して、好きなように感覚が作られ(鈍くされ)、人としての感性もいつのまにか低下させられてしまうこの時代において、音楽は、人の感覚・感性を本来へと戻す材料(機会)でなければならない。まるで生きているかのように聴き手を包み込み、感触の変化を促し、そしてそれまでとは違ういろいろな場所(感覚体験)へと誘いつつ、ムリ無く自然に人を変化に乘せるものを、この時代が望む真の音楽と言う。

それまでの音楽の記憶全てが無くなったとした時、そこに残るのは、自然界が安心を覚える、楽器も何も無かった時代の(その原因の)風景と融合し得る、人間らしい生命のリズムと音(鼓動)であるか?自然界の生命たちを生かす太陽の音楽は、この現代でも、遥か昔とその基本は変わらない。現代で

1. 人が音を作り出す際、それが自然界の違和感となることは考えられなかった、遥か昔。人間は、そのことを自然と感じ得、動植物たちもそれを知る。山に居ても、水辺に居ても、共に生きる生命たちは、人間の作り出す音の伝わりに喜びを感じ、その空間を楽しみ、心を躍らせる。人は、自然界の一部である生を普通とし、ありのままに生命を生きる。自然界も、人間からの音を通してそのことを認め、その在り様を支え、協力する。

音を作り出す道具(楽器)として植物(木)を活用していたその時よりもずっと前、人は、音色を生み出す石や貝殻を手にし(見つけ)、様々に音を重ね、連ねて、その独特の感覚経験を楽しむ。何も無くても必要なもの全てがある暮らしの中、自然の中に在る物を通しての自然な音は、人の感性をより生命本来のそれにし、調和と安心の時を安定させる。そのこと以外を知らず、そうであることを何より嬉しい、人間と自然界。後の世で笛の音がそれに加わっても、その全ては、そのまま時を癒す。

2. その音を生み出す物(石、貝殻、木 etc.)を、人々はとても大切に。ところが、そこからの音は、人としての本来の普通をどこまでも力強くするゆえ、それを良しとしないある(非人間性を普通とする)存在たちは、怯えと怖れから、その全てを破壊

で、人の心を繋ぎ、その心の芯を力強くさせる。それは、人間による太陽の音楽の、その原点の風景である。その音がここに繋がる。

永い間、人の心に届くことの無かったその音は、その時代の経験の記憶(の原因)を備える現代の表現者によって、外へと流れ出す。ただ、それを自然と受け入れる人と、そうではない人との(脳の)反応は大きく違う。いずれにせよ、それは、自然界の喜び、生命たちの嬉しいひと時。その奇跡という名の普通の時を、共に楽しみ、そのままの原因を、未来に繋ぐ。「太陽の音楽」に、時代は癒され、ここと繋がるこれまでの時代も、これからの時代も、ほほ笑み出す。音楽が心の風になる。(by 無有 6/04 2018)

は、現実的に不安の世界に居る自分(の感情)からではなく、その不安の元となる原因の世界の、得も言われぬ強大な負の存在(意思)から逃げずにそこに居続ける自分(の確かな想い)から生まれる曲によって、その基本は息を吹き返し、甦る。

個人的に(趣味感覚で)親しむものとして、そこに音楽がある時、人は罨にかかる。気づけば、感覚が思考型のそれとなり、真を失くす。そのことを知る存在が生み出す音楽に触れる時、人は、太陽の心を思い出す。そして、共に真を生きる。音楽は、作る人も聴く人も、遊び心と真剣さをひとつに、その大切さ(厳しさ)を楽しむ、変化の喜びの時である。この時代、その本来の音楽は、真に生きる人の心に、勇気と変化を与える。(by 無有 5/21 2018)

太陽の音楽（2）

1.人間は、自然界の一部。元々、自然界に存在する全てのリズムを持っていて、それを余裕で包み込む地球のリズムも備える。だから、音楽という形が表現される時、そこでは、その基本となる感覚がそのまま自然と音となり、リズムとなって歌(曲)になる。そこを離れて作為的に頭で作られた音楽を、人間は、本能的に望まない。

その自然界の一部である自分の感性が、世の様々な不自然な風景に触れることで(それと正直に向き合うことで)、自然と湧き上がる音と言葉。この時代に音楽を通して表現する人は、その音をそのまま奏でるだけでいい。頭で考え、頭で作風や曲調を作り上げていたら、そのどれもが嘘になる。

現代の、その固められた負の(連鎖の)土台の上にある社会環境は、自然界からはどこまでも違和感でしかないから、自然体を生きる存在は、音楽を通して、いくらでも、どんな風にも、曲を生み出す。湧き出るように、その違和感が音になり、自然界を安心させる。それが音楽であり、歌も曲もそうである。社会が、人間がつくる環境が、自然界が納得する(安堵する)ものになるまで、いくつもの曲が、自由に、自然に、彼(彼女)の普通を通る。(その後は、全く次元の異なる音楽が普通となる)

そこに居て、共に居る時、世の音楽の余りのお粗末さを知

時、時代がそうではない不穏な環境へと大きく変わり出した2千年程前の、そこでのある音の姿を通る必要がある。「太陽の音楽」の誕生で、その音が息づき出す。

その頃の人々の生活空間では、痛みや苦しみを伴う状況が生み出され、それまでには無かった(辛がる人たちを通しての)自然界の哀しみと、重苦しく動きの無い世の空気感が広がり出す。人が否応無く経験させられる不自然な感情は、時の流れを滞らせ、人間の世界には要らないはずの心身の不調と衝突を生み出していく。本来無くてもいいその経験は、自然界から、自然な音を奪う。

人は、木(竹)で作った笛で、自然界と自然に融合し得る音を奏で、その音で遊び、動植物たちと生きる。どんなに厳しく辛い時を経験する(強いられる)ことがあっても、ずっと昔からそうであったから、共に居ても、遠く離れていても音を奏で、自然と一緒に安心を生きる。阻止されても、壊されても、誰かが音を奏で、風にそれを乗せて、太陽の優しさと月の温もりを誘う。音は風、水、そして光。みんなで響かせ、分かち合い、繋いでいく。

自然界と一体化したその笛の音は、動物たちの骨や皮を使って音を出し始める人間たちの、その恐ろしく醜い感情によって押し潰され、笛の音色も、不自然で異様なものへと変えられてしまうことになる。それでも決してひるまず、遊び心一杯に世に逆らい、それまでの音を奏で続けた人たち。ただそこに在る不自然な様を自然なものに戻そうと、自然界が喜ぶ笛の音

跡という名の普通体験を、「太陽の音楽」は創り出す。そのための通り道(案内役)の原因でい続けることを選択した、彼(彼女)の生命の意思は、その新たな時を喜び、安堵する。そして、本人は歌い続ける。その歌に乗った彼の原因の全てが、人間経験の次元を本来のそれへと変え得る機会を創る。

原因のままの本来の生きた音楽は、癒されたい、励まされたい(慰められたい)という結果を望む人ではなく、強い自分の姿を見失ってしまっている人の、その新たな原因に届き、変化と責任を力強くする。自然界の音のリズムとの融合を普通とするその音楽は、流れない感情や動きの無い経験(記憶)のかたまりを、深くから刺激して揺さ振り、浮き上がらせ、その人が、自らそれを浄化し得る時を生み出す。土と水から離れたところで存在し得た、変化とは無縁の結果の(嘘の)音楽は、居場所を無くす。そして、音楽は、生命としての原因のそれを普通とする。

「太陽の音楽」を通して、生きる原因もより健康的に動き出す、新たな経験の創造。いつのまにか人は、音楽で平和や健康を扱う次元には居ず、音楽が有っても無くても、あたり前に平和と健康の原因を生きる時を安定させる。そこへと行く(変化に乗る)ための真の音楽と、そこからの普通の音楽。この時代に、それは、自然と具現化されていく。

8. 病むことを知らない人たちが、自然と共に心穏やかに暮らしていた遙か昔のそこでの音の風景をこの現代に招こうとする

る。不自然な世を支えるようにして不自然に生きる人に、好んで聴かれ、流行る歌は、自然界の異物と化す。

2. 人間本来からかけ離れてしまう不穏な環境では、自然界には無い、結果を生きる姿勢が幅を利かせ、作り出される物も形も、動植物たちが、辛く悲しむものである。そしてその中で、形を持たずに自然界に負の影響を及ぼすのが、その結果(過去)に居続ける流れない感情や個の思惑と結び付く音楽であり、それを好む人の無意識の意思(本性)である。未消化の否定感情と本来の普通への無感覚振りで繋がり合う人たちは、音楽を通して、都合良く自然を愛し、自然を悲しませる。

音楽が、普通に、変化そのものである原因のそれであれば、自然界は嬉しい。その時、空間は変わる。その本来の音楽の姿を、自然界に差し出し、共にそれを楽しむ人たちが、その音楽を心に重ねる。頭で聴くのではなく、音のある空間に自らの存在全てが反応するようにして触れる音楽。直接耳にあてて聴く音楽を極力減らす(無くす)ことの大切さも、体が自然に覚える。

辛いことを歌っても、その原因と向き合い、そうではない自分を生きる中でそれは歌われているから、聴く人に辛さを感じさせない。悲しみを歌詞にしても、そうである自分のその理由を見つめることからそれは始まるから、それに触れる人の感覚は、悲しさではない。人としての人生を生きる人は、そんな歌を嬉しい。そうではない人は、焦って、緊張する。

(抵抗してみたけど、何も変わらなかった)かつての経験を基に、抵抗せず、ありのままに在る中で、その抵抗せざるを得ない状況の原因に入り(原因を掴み)、そのことで様々な感じ得たことに付き添う人間時間の風景を、歌にする。歌になることで、その時と同じ体験は不要となり、次なる歌が、別な原因の風景を形にする。そんな風にして、そうであろうとすることもなく、繰り返すことのない必要な経験が次々に生まれ、原因が変わる。

その音楽に、自然界は、笑顔で付き合う。共に生きるみんなが、応援する。地球の、この人間世界で、そこに居続ける、無くてもいい負の原因が、無有日記に支えられる太陽の音楽で浄化されていく。

3.この地球で、淡々と生命でい続ける存在たちは、分からないままでいられる、全てを知る人間の感性を喜ぶ。自然界の生命たちも自由に融合し得る、その原因の確かさ。一生命としての人間のその自然体の姿に、彼らは安心して、自らの本分を生きる

分からないでいる(いられる)ことの強さを知る人は、分かることを変化に乗せる。求めることなくそうであるそのことは、どんなことも停滞させず、事の必要性を常に変化し続ける原因のそれとし、心ある風景の支え人となる。彼(彼女)が、そこで何気ない想いを音楽という手段で形にする時、自然界は、人間の負の影響から自由になれる希望を手にする。

いたが、どうにも対応し難いその強大な力に体験的理解の次元が間に合わず(及ばず)、やむ無く、彼は、人間的にそのことを歓迎する動きで、心身の消耗を可能な限り抑える。それでも、歌うごとに心が重くなり、音楽への意欲も削がれる、その存在の詩。次第に身体の痛みと動きにくさを生じさせる程になる、そこに在る形無き原因の意思は、別の新たな曲が広く世に出る機会を巧く生み出し、その作曲に関わった(関わらせた)彼に、重く、粘着性のある負荷をかけつつ、その音楽を支配する。

そしてその後、彼の楽曲の中のある要素に、その妙な詩の作風を絡めるようにして作詞・作曲するある人との、その形無き原因の(不自然な)関わりを機に、彼は、湧き上がる感覚に従い、それまでの音楽の世界での自分から自由になる。そこからは、唯一歌うことで、その作詞家の呪詛絡みの威力にどうか押し潰されずに持ちこたえられる自分を高め、彼独自の音感がいざなう、人の記憶の中の音楽を離れた曲をひたすら作る。言葉の概念を外し、動き回る自由な力を音に与え、地球自然界の中にその全てが在る、生命のリズムと終わりの無い(永遠と繋がる)音の連なりのその原因を、そのまま自らに通し、感じるままに、それを形(音楽)にする。

7.何気ない発想(思考)や価値観の下地に染み込んでいる音楽(の影響力)の、その原因に潜む、様々な感情や本心の性質。その世界発の限り無い病みの蓄積を浄化するという、奇

らず、それらを無くし、二度とそうならない経験のために、音楽は在る。平和を求めず、平和を生きること、励ましを必要とせず、自分らしさをそのまま生きること、そして、愛ある風景への憧れや希望を持たず、全てを受容し、自らがそうであることを実践してもらうために、音楽は在る。

その時、人は、どんな自分が曲を作り、どんな自分が歌を歌うかという、音楽の手前のその原因の変化・成長無しには音楽は存在し得ないことを知る。歌い手も、聴き手も、その基本形を大切に、音楽を、自然界の素朴な望みそのものとする。そして、音楽が、音楽になる。それを喜ぶ地球自然界の姿に、太陽も笑顔で音楽を奏でる。

6.「人間(5)」の2節の文章を書き終えた時、それが無ければ存在することは無かったであろうこの節の内容が、一気にここに引き寄せられる。それは、「太陽の音楽」で合流し得た、どこにも無い音(原因)の運び手としての生を生きる、かの男性(女性)の、その音楽の全てを力無いものにしようとした存在の姿(意思)。そのことさえも、望むべく次なる原因として浄化され、活かされる時を迎え、彼の想いは、新たな歌の誕生(創作)を以て、それに応える。太陽の音楽は、広がる力を見せる。

偶然を装った必然の出会い(意図)から、彼が何度か曲をつけることになった、その存在の生み出した詩は、出来上がった後、多くの人に受け入れられ、親しまれることになる。彼の内なる生命の意思は、そこに潜む非生命的な原因を感得して

不健全さを普通とするその動きのない原因で不穏な風景を無意識に作り出す人間たちは、頭で分かること(形)に執着し、分かり得ない(形無き)ことに不安になる。でも、人間の世界も含め、自然界は、分からないこと(原因)から生み出され、分からないその原因で支えられている。その分からなさの質を高め得る存在に、そうではない人は、恐怖を覚える。

無有日記は、自然界と自然に融合する、その原因のままの音楽を、ここに招く。ただ、その責任は時代を担うものであるゆえ、形ではなく、その原因を流すことで、時を動かす機会とする。そして、大切な出会いを、ムリ無く経験してもらう。そのためのこれからの、それぞれの感覚が、太陽の音楽のメロディになる。

4.この「太陽の音楽」(関わりの EW)を通して、人がいつのまにか普通としていることになる経験は、細胞が負担を覚える音からは自然と離れていられること。要らない音の蓄積による負の影響が無くなっていくので、自ずと心身が辛くなる音楽への違和感もはつきりとし、その影響を遮る感覚的姿勢が普通となる。感性も、普通本来のそれとなり、不自然な音楽のその歪な原因の風景(意図)からも自由になる。

音は、空間を通り、人の耳へと届くものだが、その時に、そこに潜む(秘められた)様々な性質の原因も、感じる感じないの域を超えて、多次元的に外へと流れ、細胞や物質、あらゆるところへ届く。自然界の生命たちは、音に敏感で、その送り手

(生み手)の形無き原因の影響に細胞レベルで反応し、それを以て、本能による然るべき生命活動へと、自らを展開させる。その世界から人間の音楽を観た時、自然体でいる人間の、その自然感覚の脳による声と音が、自然界の安心のそれであることが分かる。

人間がその自然界が辛くなる音を作り(生み)出すことはあってはならないのだが、個人の思惑(感情)とお金(商売)をそれに重ね合わせることを普通としてしまった人間たちは、いつのまにか、自然界に生かされ、そして自然界を生かすという人間の基本を人生から切り離し、それが許される(正当化される)不穏な世のその負の土台を、無くてもいい音楽で固めてしまう。それは、人間の退化の象徴とも言える。

歌い手も作り手も、そこに在る本心(本性)の質は問われずに(放って置かれたまま)、ただ上手ければ(売れば)それで良しとされる、未熟な音楽観。本当はそうでないから、そうであるように(そうであろうと)情感たっぷりに、中身の無い優しさや愛情(理解や励まし)の歌を歌える歌手(作れる作曲家)の、その原因の嘘。涙する歌も、感動する曲も、嘘を本当として生きる(力のある)人の嗜好品であり、自作自演の嘘芝居である。それはそのまま、世の不自然さと不健全さが安定していることを意味する。

人間の脳を慢性的に不自然にさせる音楽は、当然、自然界全体に悪影響を及ぼす原因となり、動植物たちは、辛く悲しい時を生きることになる。人間であれば、そのことを知り、人

間本来を元気にする。「太陽の音楽」は、人間が作る空間を、自然界が嬉しいそれへと変えていく。

人間が、人間らしく生きる(生きようとする)時、その元となる脳の活動が健全であれば、自然界も、未来地球も嬉しい。ここに「太陽の音楽」が在るということ。それは、そのことを普通に生きる自分を通して、自然界を安心させ、未来に喜んでもらうということ。音楽が、生命本来からなる音であり、声である、その原因を普通とする時、時代は、次の時代に繋がる、永遠の癒し色になる。

5. 太陽の音楽は、太陽が嬉しい音楽。それは、太陽が見守る地球自然界の、安心の音色。そして、その安心の時を支えてくれる人間の、自然体の音楽。

太陽の音楽は、自然界に負荷をかけず、もしそうである現実がそこにあれば、それを浄化し得る原因でい続ける、生命そのものの音楽のこと。その送り手は、自らのその姿を普通に、曲作りを楽しみ、自分に正直でいるありのままの人生(感覚)を、そのまま形にする。向かわず、求めず、ただ生きることを生き、音楽にそれを重ねる。

そこで息づく(形を生み出す)形無き原因に、地球は喜び、太陽もそれを嬉しい。それは、自然界に生きる生命たちの心と融合し、共に支え合う心ある風景の中に溶ける。

自然界が安心する音楽を、細胞は喜び、それにより、平和も健康も普通になる。悲しみや辛さの原因がそこに在ってはな